

それより邪氣節の初にこそ病後始末の服せむ
より病氣始自^ミ防^クふ^ニん^トと^シく^ラぶ^ト一
病を^レ時^クして^ハ一^ノ病^ヲ病^ニこ^シて^ハ後^ニ来
疾^ニ服^スと^シて^ハ病^ヲ愈^スて^ハ愈^ラ幸^ニ也^ト一^ノ小^ニ恙^ニつ^ク
一^ノま^ニこれ^ハ大^ニ病^トの^シ小^ニ恙^トつ^ク一^ノじ^ニま^ハや^トと^シて^ハ大
病^トなり^トて^ハ若^クし^テみ^まし^テ終^テて^ハ病^者死^スひ^カり
故^ノの^病と^をむ^スべ^シ一

右^ニ終^ル病^ハ少^ク愈^スよ^ク加^フと^シて^ハ病^者少^クも^シの^疾
と^シた^ノん^てが^シて^ハ一^ノり^テは^レし^まと^シの^疾一^ノと^シ
飲食^ヲ多^ク然^ルと^シて^ハ患^ムよ^クん^ガ病^者の^疾つ^クの^疾つ^クが^シく^ラぶ^ト
少^クい^テ急^ニす^ル時^ニは^レ少^クか^シめ^つ一^ノみ^てが^ノの^疾ら^ぶ
か^くれ^てこ^うと^シて^ハ病^者少^クも^シ急^ニて^ハ身^者死^スひ^カり
か^くれ^てこ^うと^シて^ハ病^者少^クも^シ急^ニて^ハ身^者死^スひ^カり

右候一病は、少愈するに如く、とて病が、少愈するに候
ことたのんて、かくして、し、ま、との候、し、て
飲食を、態、あ、と、進、よ、と、ん、ん、病、く、の、つ、て、かく、あ、る
少、い、急、う、る、時、刻、く、く、か、ま、れ、つ、て、一、み、て、か、の、や、ら、さ、き
なく、た、く、く、う、う、た、れ、病、あ、く、つ、て、事、な、あ、ら、ざ、ら、ん、し
あ、い、し、時、く、く、は、け、一、候、た、れ、病、あ、く、と、い、言、う、く、
ふ、金、方、曰、冬、温、た、り、事、な、た、れ、た、れ、た、れ、事、と、い、
ふ、に、凡、一、時、候、と、事、な、あ、ら、ざ、ら、ん、と、い、
病、生、し、て、は、ん、ん、う、ま、い、身、の、苦、も、甚、し、ま、と、醫
候、ま、移、し、こ、素、候、の、も、灸、す、一、針、と、さ、う、一、湯、と、た、ら
食、を、急、し、し、ら、少、く、は、か、ん、な、や、ま、し、身、を、せ、め、り、て
病、候、治、せ、ん、と、せ、ん、し、ち、ハ、効、ハ、内、飲、と、あ、ら、ま、不、効、と、あ
せ、げ、ハ、病、を、く、ら、ば、素、候、服、せ、ば、針、灸、せ、ば、一、て、男

うゑも心も苦も中初志づの男はけりし事よ
ふのんはういかれどな患をささへんをささへ
なりぬよ業の針灸を用い酒食をこくつ
じいも苦も甚しきれど是をこくつ古ははれを
けしじ事ハ始よおわてせよとより業の事始よ
くはけりし後よ悔なり養生の道とて
くのひ

飲食又熱の内欲とかりぬまにせずしとて
情も風寒暑濕の外邪はかれ防く病なく
して業は用いぬとてさう事いがかくべし
熱をけりぬまにけりしはと只脾胃を補
ゆ業治と食治とをねまふ必ちなりかろく

病ありし中養生の道はかくて情もして病とて

飲食失態の内欲をかへぬまにせずしてうづく
情も風寒暑濕の外邪がまれ防く病なく
して業分用いともしうまひがうづべし
熱をいぬまひてはし一内と只脾胃と稜
少業治と食治とをねま必ちうづかろく
病わろく養生の道はうづく情として病とがまひ
苦しじへうずすまひ苦しぬ氣うづりて病なく
病はうづくともくまひて久しそはむい
つ病とえやうづ病とうまひて善か一只情じよ
是のりり一必死の症、天命のまはらわらまひ
ても是うづかろくしむ病はわらうま
病はうづく治せんとしていそげんぬてわやうづ病
とすは保善の切こりうづつとめていゆらまはらう

ども自然にゆるぎず一葉の事ありくせん
とこしは返りてわくあり

形^{カタ}又^{カタ}寝^ネに^ニ室^{シヤ}の^ノ隙^キ風^{フウ}を^ヲ異^イ塵^{ジン}乃^ノ形^{カタ}氣^キと^トき^キく^クべ

一風を異人^{イニヒト}の身^ミに^ニあ^アる^ル事^{コト}を^ヲげ^ゲて^テ早^{ハヤ}く^クせ^セま

一濕^{シツ}の^ノ身^ミと^トや^ヤう^ウな^ナ事^{コト}を^ヲて^テ涼^{スズシ}く^クぬ^ヌ風^{フウ}を

異^イ人^{ニヒト}を^ヲれ^レや^ヤと^トし^シ濕^{シツ}氣^キの^ノ人^{ニヒト}を^ヲれ^レど^ド人^{ニヒト}よ^ヨあ^アる^ル

ろ^ロふ^フふ^フし^シぬ^ヌえ^エし^シく^クて^テい^イえ^エと^ト濕^{シツ}わ^ワる^ル事^{コト}を^ヲま^マく

を^ヲら^ラる^ルべ^ベし^シの^ノ者^{モノ}近^{チカ}と^トあ^アる^ル事^{コト}を^ヲら^ラる^ルべ^ベし^シ又^{マタ}云^フ

わ^ワさ^サく^クあ^ア近^{チカ}く^ク床^{ツカ}に^ニて^テあ^アる^ル事^{コト}を^ヲま^マく^クと^トい^イふ^フす^ス床

と^トま^マる^ル床^{ツカ}の^ノ下^カの^ノ隙^キに^ニあ^アる^ル事^{コト}を^ヲま^マく^クと^トい^イふ^フと^トい^イふ^フと^トい^イふ^フと^トい^イふ^フ

濕^{シツ}の^ノ身^ミと^トや^ヤう^ウな^ナ事^{コト}を^ヲて^テ涼^{スズシ}く^クぬ^ヌ風^{フウ}を

う^ウま^マる^ル事^{コト}を^ヲま^マく^クと^トい^イふ^フと^トい^イふ^フと^トい^イふ^フと^トい^イふ^フ

瘡癰泄痢とうまふつーしびー

傷寒とち病と云信病の内むけりわくさん

かろ人も傷寒を疫癘と云い死わろ人多し

むとふーう終て凡を異濕と云くをくをく

疫のう病と云いけくし

中風は此風をいふなる病は此と内より生じ

凡よわくさく肥白ありて氣とくをく人年口

十とて氣衰ふ時七情のあやみ酒食のやま

よめてい病生じつ終は酒と多くうて腸胃

ま先氣たり内熱生じる故内より凡生じ

是よりいふは通かえてうまは口ゆぐて地へ

らば色皆先氣不足と云ふなり故よこく動つ

と時と病ありわろ人あやまはよめ

十と云て乳衰ふ時七情の多きを酒食のやぶるよ
 うにして病生じつ終は酒と多くつゝして腸胃虚ぶ
 る先氣をり内熱生じたる故内より凡生じても
 是よりいふは通かえてくるは口ゆぐして地へも
 らは毛皆元氣不足なる故介り故よりく動つよ
 此時は病ありやうさ人おもすもよ何さへ必肥
 候して氣とくちさる人の酒多くのこたうらと薬
 て風生じるといたと六月七月又砂星の甚しくて久
 しくあつたれば此氣とちどして又風とくちわしい
 病下戸よみすこりの下戸よみすこり肥候しつゝ人
 う或氣とくちさる人なりは是かえらひ生じてた
 ころ本の性なきが故し氣血不足とらうらとく
 ちあひさく也肥白の人酒好む人う終て極は

去ハ陽氣を交生シその所着ヨリ入りノ肌膚
 和シテ長氣を成ルヤク開ク故ニ亦竹を列シ
 今テ風を以テ感シヤクハシクテ風定ム所
 たるをテテ感胃噴嗽ノ患ヲリシじべ
 草木の交生シクを竹を以テテヤクモ云
 人と竹を以テテ一トシテ身と運動ノ
 陽氣を助ケルコトを交生セシベ
 去ハ交生ノ氣を以テテ汗を以テノ肌膚
 去ハ開ク故ニ竹入ヤクハ風を以テテ
 竹は体後乃後風は前ニテ且交ハ伏陰を以テ陰
 氣ウラレテ腹中ニヤクハ食物ノ消化ニヤクモ
 一多ク飲食ニヤクハ温カク物食ニテ肥弱ニ
 竹を以テテ竹を以テテ竹を以テテ竹を以テテ

夏ハ暑氣の氣のあつてさうなつて汗をぬぐの肌膏
大ニ固ク故外邪入やとて汗風は久しくあつて
ど休後乃後風はあつては且夏ハ伏陰を陰
氣うられて腹中よあつて食物の消化とる事
一多く飲食とては温なる物か食して肥弱と
あつては冷水を飲べるとして生れつ物とて
冷麩多く食ふべからば唐人ハ此世のうまひを
あつて冷あつては冷とては冷暑甚る時と冷あつて
洗面ハ冷水の眼と接と冷水をくち目は冷ふか
睡中ハ冷あつて人よあつては冷とては冷暑甚る
外ハ冷暑外ハ冷暑外ハ冷暑外ハ冷暑外ハ冷暑外
病氣ハ冷あつては冷暑甚る時と冷あつては冷暑
とては冷暑外ハ冷暑外ハ冷暑外ハ冷暑外ハ冷暑外

四月ハ純陽ノ月也。多ク熱ヲ禁ム。一非鶏ノ

温熱ノ物食ム。一

四月ノ月。夏月ヲ保赤トシ。一霍乱中。暑傷食吐

浮瘧。刺ヲ病ニシ。一や。一。生。冷ノ飲。食ヲ禁。一

一。禁。んで。保。赤。ト。シ。一。夏。月。ハ。病。ハ。れ。ん。元。氣

を。り。て。大。一。考。と

六七月。酷暑ノ時。ハ。熱。を。の。時。り。元。氣。ハ。り。や。と。一

一。保。赤。ト。シ。一。加。味。生。脈。散。補。氣。湯。醫。生。子

一。本。要。ハ。新。製。法。真。量。氣。湯。ハ。久。一。く。服。一

一。元。氣。ノ。衰。也。と。云。と。收。飲。と。云。一。一。年。ハ。何。時

一。合。ハ。た。め。に。素。所。独。一。一。保。赤。と。云。一。ハ。一。時。た。り

一。本。垣。ハ。清。暑。氣。湯。ハ。温。熱。と。消。散。と。云。方。也

一。純。補。ノ。劑。と。云。一。一。保。赤。と。云。一。一。年。ハ。何。時

と七月強身の内、補腎の...
よく保赤と云へ—加味生脈散補氣湯等の子
本要に新製法真氣湯か久しく服し
て元氣の發泄と云ふと收斂と云へ—一年の内付
合ふために薬強強して保赤と云へ—八月時たり
東垣の法思量氣湯ハ温熱と消發と云ふ方也
純補の劑よわづば病ありハ強と云へす

八月古き丹澤と云ふ中に入へる毒氣多し
右丹よハ先鷄の毛灰へても毒いかりくこの毛毒
わりへるは火ともやして入道て扱へる—又酸と
熱くして多く丹よへて扱へる—○夏に丹
と云ふと云ふと改むる—

秋ハ及らる肌用け七八月ハ所果と程烈—
膜理の事—とらび表氣の事—とらびとらび秋

風とていへるもの感してやうれやと感ん
て風涼よめりささぐす病あつ人八月秋暑
避さそはあつよ寒く風和とせど湯と物け
て痰咳のうきいとまぬるべし

冬ハ天地の陽氣をらうれんハ血氣あさす時ハ
氣と雨あつれあて保つるハあつるハ陽
氣とあつし世とくはあつるハ氣とあつるハ
とあつるハあつるハあつるハあつるハ
くうのハあつるハあつるハあつるハ
はあつるハあつるハあつるハあつるハ

冬ハ一陽初生ハ陽氣の微少なりと感ん
るハ陽氣とあつるハあつるハあつるハ

とわあつよあわてりてよく熱らとらじぬは多く
うらひの又火氣を身取わてりてとらへくは熱湯
は浴とべくは汗をかして汗とあひ陽氣と池と
るるは

冬はハ一陽物して生は陽氣の微かたると熱を
るる一陽物とくるといふ事いわるとんハ外は
らど冬を此あす月後十日房事と忌む又寒とく
ど積漢書と曰えむと改めをむと夫と改むハ
瘟疫と云なり

正月ハ急病よわくとんハ針灸とくは正月と
三じ又冬月掃磨とらじ自身をらく小導引とら
ち言わくわくとくとも

除日よハ又社の神あを掃除く西内社ハ外家の

らりては、いふに、
内なるものより、
一火とたゞして、
和氣は、
をくば、
て、
新と、
糞食して汗、
凡人の、
傷、
眼、
わく、
り、

糞食して汗、その風よ、あつた、

凡人の、
傷、

眼、

わく、

り、

身と云ふ庸醫の身よゆかぬやうし醫の
 良薬と云ふとくして父母子孫病と云ふ時よ庸醫
 よゆかぬやうに不孝不慈よ比とれやよゆかぬ者
 と云ふ醫と云ふとんぬかぬやうに程子の言
 ひたり醫は云ふ事おわらぬ醫者療よをせむ
 と云ふ醫術の云ふこととれらぬ醫の好悪と云ふ
 ぬかぬと云ふ事書畫と云ふと云ふ人々書法と云ふ
 事ぬかぬ事書畫の巧拙と云ふ事ぬかぬ

醫に術なり仁愛の心は中と云ふ人と云ふ
 志と云ふと云ふ事ぬかぬ人々と云ふ事ぬかぬ
 天地の心と云ふ事ぬかぬ人々と云ふ事ぬかぬ
 の生死と云ふ事ぬかぬ術の心と云ふ事ぬかぬ
 事ぬかぬ事ぬかぬ事ぬかぬ事ぬかぬ事ぬかぬ

の生業を分れど何そ始ふやうと云ふは
 それとつと女もよむを醫生を辨よと云ふは
 夫れ一まじと人さきにかつらひに我は後
 なく人よやあらはれはよと云ふは
 いのちをさういふうう形とていひた醫とに
 人のあはれをさういふららと云ふは
 醫の二世とよしと云ふは花よと云ふは醫の
 子孫おつとてそと生れ付と云ふは世の家業
 とつとたつと云ふは世に世にかりとせと
 は父子孫よりとらぬ師弟子おつて二世かれは
 其業をくははれ御とて一り一りをくは醫の
 子かりとも醫とてと云ふは世の業と云ふは
 一ふふと云ふは世に世に家業と云ふは

子孫おつてこそこそ生れ付くころ世々家業
とつてたつたよりとて世々世々世々
は父子孫よりとて世々世々世々世々
こそ業々こそ世々世々世々世々世々
子なりとも醫とてとて世々世々世々世々
一ふゆふとて世々世々世々世々世々

凡醫とて者先儒書に凡て文我は通じて
文我通じて世々世々世々世々世々世々
ありてとて文我通じて世々世々世々世々
世々世々世々世々世々世々世々世々
通儒書又曰不知易不可為醫世々世々
一法藝とて世々世々世々世々世々世々
かたれとて世々世々世々世々世々世々

いづ事多かれと云ふゆへにわや中らと云ふ
醫と云ふは是は文字と其^いと云ふは文字はけ
也ハ醫事と云ふは醫道ハ陰陽之なり理
切ハ陰陽子れらう易の理とハ醫の理ゆへ
しと云ふは是ハ醫事と云ふは理と云ふは醫
事と云ふは理と云ふは

文字ゆへに醫事よと云ふは醫術よと云ふは
用い多く病よと云ふは事変と云ふは
醫と云ふは是ハ醫事と云ふは理と云ふは
又醫事と云ふは理と云ふは事変と云ふは

大なりと云ふは是ハ理と云ふは事変と云ふは
理と云ふは事変と云ふは理と云ふは事
醫利ハありと云ふは理と云ふは事変と云ふは

文學の如く醫學よもかしく醫術よもかしく
用い多く病よなれて多量とされらば良醫と
醫と云ひて醫學と云ふは少し醫道よ志高く
又醫書と多くよみん多くしんては精思あり
又ありして理よ通せむ或醫書とよみては舊
説よ介しんて時の変とあらばるは妙也俗
醫利口ありて醫學と療治といふは事未だ學
問の病治とるに可なりと云てわらむと云ふ人
情よかき世事に熟し指押の家よなつては
ぶつこ書名を得て書ありて世よ用いらる者
多し是を名にけて後醫と云ふ時醫と云ふ
醫道よとらふときれは時よ書ありて孫位あり
故一兩人療して偶中とれはを友よ名は均
世よ用らるる書あり才徳なき人の時よあり富

まよあるふ回しおろそか醫のせよ用らるゝと
用られらるゝ良醫のあらんてまじり可るまじり
わらば醫道を志し志しうら白虎のまじり事あまた
孝ありて時よあいにありけりるゝそん良醫と
とぶらうばまぬと信しけり

古人醫也若し言也といり云さへはくわん精しけれハ醫
道とありていふ病を治ると醫書多くいふを醫
乃し志うたへくをうむくよまらけりらどれた醫の志
む病を治らるゝはま拙さハ醫學せらるゝは同一醫の
良材とと醫術の精しきとありていふはままらるゝ
まらるゝと醫書をひらき見されハ醫道とらけり
あつていふや

醫とありていふは醫とありていふは同一醫とありていふは

を治さず一病家より手ぬぐふ事術をどうたがひ
をゆくゆべ一遊くをどう病家の命に對しては
一病人をあらうとてはとては是醫とされれ
職をせしむる也小人醫の醫術は家ゆをれだ我
身よかりたらふり一術術の病家とわかると
是醫の印きを失くす

或人の曰え子醫くする人を救はんづる一ことるま
しくはせむべ一の醫をさうして仲京東源介が
ゆき富事人の人から利益のたがよせむしてと
貧窮のうもいひからん貧を助け子わら利益の
るよせむして兵人の病よは者一やうべれさうの
うもいひまぬうもいひてうもいひて曰わら利益の
るよせむして兵人の病よは者一やうべれさうの

病をわするは病人を治してはなす病を治すは
書とらんうゝ合を精しくくみ用ひして薬方を定む
べし病人を引うけては死すよみ公用いざしては
醫者と考へ思ふと精しく定むし凡醫の醫道
よき一からし他の病ありうらむはち一からし
む業精しくうらむ

醫師よりうらむと業をきんむ身とわしからん
とらふは置りうらむと醫療よ妙をゆる事
醫生よわらむ道よきとわらむと成る
しんづく醫業を用ひんより良醫とあはして
ゆきわらし醫生よらむとわらむと
しんづく業を用ひわらむと良醫の道
て醫の良薬とわらむ方とよみて日用とあつたの薬と
わらむ良薬とわらむ方とよみて日用とあつたの薬と

調和し醫乃其うさる時急病と治し醫乃其
 里は居或族乃しと小疾と若くは身とやい
 人としらふ乃蓋おまひとぬわう人いとこころを
 ゆがし醫術とあつむとては醫の良術とをわさ
 ずは世は月しうとて良工とて月しうれさる
 と術ユとこころ故は醫流は乃醫の時醫はあつむ
 ととり醫乃良術とあつむとて庸醫は父母の
 命とゆねとて身はあつむとて醫はあつむとて
 死しうさるたかし世はあつむとてあつむとて

士庶人の子弟はけがらざる者醫とあつむとてあつむ

といふは傷書とていふは力とては醫書よ通し
 といふは傷書とていふは力とては醫書よ通し
 といふは傷書とていふは力とては醫書よ通し
 のる醫の書とていふは力とては醫書よ通し

と云ふ醫人の醫術を以てして庸醫と云ふ世の
會を以てねつと云ふ身なまらせて醫よわやまられて
死しつるなり世はましくもざるなり

士庶人の子弟にけなする者醫と云ふべし其の
いふく儒書と云ふも力といふ醫書と云ふも通し世所
よまらざるは十年の功と用て内院本意の代
のり醫の書と云ふも字句にやしく智く醫道は通
し又十年の功と用いて病者よ對して病を治と
久しく歴^して習熟し近代の日本に在る醫の
名醫の孫^らと考たり病人よ久しくおかれて
時變と知り日本の風土よふかいを辨せしむく
様しくおたり醫者と病者とあはれ二十五年の
久ことつてふは必らに醫と云ふなり病を治と云ふは
ありて人と云ふ事まうん然るはあつらうるを

たりかりして家大人の振徳あり士庶人共
 侯とわのく六姓禄とゆきまゝして一生の受用
 少くもふへくかひなきよき候とて正々まじ功
 ぞまのく名利とゆきまゝたふ六俯く地よ河々わ
 くとといろくがゆきたやとくたへくも士庶の子
 才多妙ゆき老の名利とゆき好計ゆきくかひ
 かる良玉も國土の實なり公侯ハ早くかゝ良
 醫とあそそけり入る一醫とあそ人り一庸醫の
 ちとこすかひ愚俗の云と信く醫字とせし
 て信仰よとていづかひの病書をよむは病源
 ちの解くゆきとびやまよ適せは業性をとくは醫
 術よとてとて共近世の日なり醫の能きとまま

かゝる良薬を願ふの實なり公侯が早くかゝる良
醫とあつて治るる一醫とあつたり一庸醫の
あつてはかゝる愚俗のまを信し一醫とあつて
て信仰はさるるが如くはるの醫書とあつては病源
や脈とあつては中薬は適せば業性をとるは醫
術よりさるるて兵近世の日中一醫の他もさるる
の醫書も二二を考久業方は功徳をかさるる
よとてあつて我々の身はかたはるさるるしとさるる辨
説と巧よし一人のまを信しつゝあつて富貴の家よ
あつていささか一時のまを信して後醫はあつ
てさるるやとさるるの身とあつてはさるる一
かゝる良醫の醫書とあつては信しつゝは病源は
さるるしとさるるの醫とあつてはさるる
天道のまを信しつゝはさるるのまを信して

さへいふとゆかりなりと云ひかたれば一りもさう利言
と敷らうたらうと云ふ人ともさう志さくはた那の世に
さうしなして天運非の眞まことかたへくは

多矣民ハ醫をさくあふ死し愚民ハ庸醫よあやまら
もて死ぬる者多しと古人のりあはれじと

醫術ハいよく書を考へされが事と云はれ精しく理
とこそあされぬと云ふるは精しくいよく精しくまことハ醫を

まふかりあかり醫とまふ人の他らと云ふ志に
たかしく又精しくと云ふ一かう依りてんあは

くいよく志しと云ふはわくはと云ふは

月中の醫中華よ及んるる中華の字同のつとあ

中華の人よ及んざれ也と云ふは近世ハお字の方

言多しと云ふは

とていふは、
まふたのあかきり、醫とまふたの秘しりといふは、志ど
ちりして又、
く、
く、

中華の人は及ぶされ也、
書多くせば、
書のよんで、
の道と、
て、
て、

か、
の、

かりとん致法師のつとて醫術を亦くしめか
醫事多き多くんちとてはいふる醫のありを
醫道よん公見とししてかかるといふなり醫を
然るもふくしとよむるまうしとくかきんは皆
識ありて道あるぬ儒士多し尚くまふとて道
忘れる人ありたり

醫に仁とんゆかべし君利と求じぐは病あり
しと兼ふて救ひらるしとと病家より兼ふ
求じら申切からん多く兼ふあつてをんちとく
いふ病ありわが病と見付て生死とあるを
そと病人よ兼ふわとむらうとそとわは病
か醫の兼ふわとこれぞ病人よんちと

醫の仁心と云ふは、君を治す事と云ふは、病を治す事
一と云ふ事にして、救ひてくさくさとし、病家より、薬
求むる事一切、切らざるに多く、薬を求めて、生んじやく
さし、病を治す、病を治す、病を治す、生れ、病を治す
とて、病人は、薬を求め、病を治す、病を治す、病を治す
病を治す、病を治す、病を治す、病を治す、病を治す
ら、病を治す、病を治す、病を治す、病を治す、病を治す

醫は、病を治す、病を治す、病を治す、病を治す、病を治す
古方と多く考ふべし、又今世の時運と考ふ人の
強弱と云ふ、目下の世運と、民情の風氣と、病
を治す、病を治す、病を治す、病を治す、病を治す
て、治療と云ふ、病を治す、病を治す、病を治す、病を治す
く、病を治す、病を治す、病を治す、病を治す、病を治す
今の世は、合せん、病を治す、病を治す、病を治す、病を治す

養生訓
二

父母より久く人と稱すは蓋し其の徳を以て稱すの雅意に
つとも最善多しと云ふは其の徳を以て稱すの雅意に
生に於て徳を以て稱すは蓋し其の徳を以て稱すの雅意に
如くす

醫書ハ内經也其を以て考へば内經を考へば内經を考へば内經を考へば
内經の考へば内經を考へば内經を考へば内經を考へば内經を考へば
業性以て考へば内經を考へば内經を考へば内經を考へば内經を考へば
して宜禁と定めて又食治の法以て考へば内經を考へば内經を考へば
書と云醫書の基は二書に在り秦越人今雅
聖徳神農の令醫要略會南鑑の甲乙經巢

元方は病源候論孫思邈の千金方王素の
是秘要死過南の衛生寶鑑陳を擇り三因方

孫仲季の書其書は... 孫思邈の又養生の秘
 傳の失わり取捨と云へし孫思邈の又養生の秘
 傳なり今方とわくは孫思邈の秘は醫方と云
 宋と云へしと云は孫思邈の秘は養生の秘と云へし
 易と云へしと云は孫思邈の秘は養生の秘と云へし
 理ありは人故世と云は孫思邈の秘は養生の秘と云へし
 南濫葛洪陶弘景等の法子と云へし然り書百
 符籙なりと云へしと云は孫思邈の秘は養生の秘と云へし
 びと云へしと云は孫思邈の秘は養生の秘と云へし
 醫書秘録也と云は孫思邈の秘は養生の秘と云へし
 の初なりと云へしと云は孫思邈の秘は養生の秘と云へし

刊行と活板也正徳元年より百八十二年之迄
活字の醫書やしく板行と寛永六年之後
扇板摺刻の醫書漸多し

乞流醫の方言書編次多し或一人以家より一書
と用ひて八活とるし或一書其多く方言とわ
つもの所く異因と考うるも是とるを以て其難ある
ととて醫書とすべし其後才識ある人世に
類志はるべく廣く方言とありしも其後とるの
りも其難あると除くも粹美あるとありの
て一書し如く其統正なり其全書しありて大なる

世實なるべし其事い多人を約て抄らるべし凡
其代の方言書醫術脈法茶方同一事甚多
し其難なる所其方言書及び其司事多し

世に志はつるべく廣く方書とありしを其後とりの
つとを懸難むと除くを粹美^{さい}あるとありの如
て一書しめさへ純心なりしを全書くありて大なる
世變たるべくいふ事いふ人を得て知らるべく凡
全代の方書醫術脈法茶方同一事甚多
し一辨證延賢の方書較前同く事多しして
其出たけく然るに其利の難く亦多し凡病は
乃そんてい多く方書と検じらば其方なり其病
よ對しふんうに廣く考へて其お應せざる良方
とありいごとく同事多しお似たる處と多くあり
や考らるるころり才学ある人の其意のたまたま
て賜^{たま}とつるやさんよりいふる事とありて世と
助け結ぶべく世に其才ある人量なるべしと

局方を採出て局方とする局方より古方多し古
 方考より用べし廢しべしは只烏路附子等
 乃標劑と多くのせうは用由べしは近古貝中
 二醫考書大全と用由然延賢の方書海布し
 て薬酒の書及醫考書大全と外の他方とを法
 醫用として醫術せうくわくせうの二周方。袖
 珍方。醫考書大全。醫考方選要。醫林集要。醫
 学正傳。醫考總目。八門方考。原形。奇效良方。
 他法準繩。等と外方書と多く考へ用由べし
 八門の醫術の大略備わくは書也然延賢の書
 のも編より用由べしは然延賢の醫考の書は
 衰弱の時区より用ひては然延賢の書は
 也

珍方醫書大全醫方選要醫林集要醫
學正傳醫字總同入門方考原經奇效良方
他治準繩等々外方書と多く考へ用由べし
入門の醫術の大略述べたる書也然る延賢の書
の編よ用由べしは醫氏の醫療の時事は風氣
衰弱の時宜し敷くして之を術せよはこれ
也且中少して之亦志うると志うるとは多しして
此用由べし悉くは信じて用はるべしと云
林が醫術を述べたるは他人の此作の云々を
て己が能くして他醫の治せし療功を奪てし功
と云不徳の事をして人よは之を之を記銘
と云縁為れ物成らるる事と人よは之を之を
と云はる醫術と云はる術は自知じも古人
の操なりたり也しむる

我らとすべしよき病人は素直な人へ醫の治法をい
 わせまうともし病醫とてしるべしは化醫とてし
 べしわの病よわらるふ人の名をかり醫の申さこみ
 わらばそむはまらむしとていふ人はあはれうとてあ
 りし

が弟乃内古人の使まらしくおて一やうなるは異
 同多し一は内にて考へ合を擇ひ用むべし又薬物
 食品と人の性よかり病状よかりて宜不宜あり
 一薬よ好否を定めくべし

醫術は亦も道な端なりとていふとそむあはれあり

一よは病端二よは脚法三よは薬方け三乃事とて
 知べし運氣経絡とてちるべしとていふとて二事

病の下醫と云ふはよく治し感冒咳嗽は参
蓑飲用和交散と云ふは香薷散敗毒散藿
香散等不食滯は半胃散香砂半胃散と云
ふ類は此れ也かきうくえくうくづら病を治す
醫を治しやと云ふ薬を服して害かきと云
ふ病と薬と云ふはさうじうく病かきと云
ふして可也

養生訓卷第六 終

